

01.

北海道

北海道地方会

三神 大世

(北海道大学大学院保健科学研究院)

日本超音波医学会北海道地方会の発足に遡ること4年、その前身である北海道超音波医学研究会が、福田守道先生（札幌医科大学機器診断部・教授、現同名誉教授）のお声かけで1987年に誕生した。同年7月にその第1回目が札幌で開催され、和賀井敏夫先生の「超音波診断法事始め」と題する講演と28題の一般演題が発表された。当時、超音波は臨床診断の新しいツールとして勃興しつつあったが、各臨床領域でその実力をまだ十分評価されていない雌伏の時代であった。地方で超音波診断を親しく語り合う本研究会の発足は、その前年の福田先生による日本超音波医学会第49回学術集会の札幌開催とともに、北海道の超音波医学はこれからという機運を盛り上げた。

日本超音波医学会が打ち出した地方会制度は1991年にスタートしたが、北海道もこの年7月に第1回地方会学術集会を開催した。上記研究会がその母体となり、地方会運営委員会が組織された。初代の運営委員長には福田先生が就任され、以後、年2回の地方会学術集会が行われることになる。地方会活動は、北海道の超音波医学の臨床への浸透とともに、これに関わる医療従事者と研究者の結集に大きな役割を果たした。この間、福田先生は、1994年6月に札幌で、この領域最大の学術イベントである7th Congress of World Federation for Ultrasound in Medicine and Biologyを開催された。翌1995年にも札幌で、北畠顕先生（北海道大学医学部循環器内科、現同名誉教授）が8th Congress of the International Cardiac Doppler Society（第6回日本心エコー図学会と併催）を開

催されるなど、世界の超音波医学の潮流が北海道で紹介され、私たちを鼓舞した。

1998年、福田先生の後を受け、北畠先生が運営委員長に就任された。北畠先生は、超音波の画像診断としての側面だけでなく、定量的評価の重要性を世界に向かって説かれ、北海道の循環器超音波の発展を促した。それまで福田先生が育ててこられた消化器領域に加え、北海道の超音波医学を駆動する両輪が揃ったことになる。北畠先生は、1999年に第72回日本超音波医学会学術集会を開催され、21世紀を担う若手医師・研究者と検査技師の育成をテーマに掲げ、多くの技師を含む多数の参加者を集めた活気ある学術集会となった。

2002年には、北畠顕先生の後を受け、名取博先生（札幌医大機器診断部・教授、現同名誉教授）が運営委員長に就任された。名取先生は、分野・領域間の垣根を越える幅広い視野で超音波医学を俯瞰されるとともに、北海道医学会との連携など、超音波医学の地域への浸透に尽力された。名取先生は、2003年に札幌で、第76回の日本超音波医学会学術集会を開催された。臨床各領域と超音波工学との融合を基調としつつ、超音波医療情報システムのあり方に焦点を当て、今日の我々を取り巻く医療状況を先取りするユニークな学術集会となった。

2007年に名取先生の後、山本克之先生（北海道大学大学院情報科学研究科・教授）が運営委員長を引き継ぎ、三神大世（筆者、北海道大学大学院保健科学研究院・教授）が副運営委員長に任命された。北海道は小さな地方会ながら、超音波工

学研究のレベルが高いのは、ひとえに山本先生のご功績である。山本先生は、臨床の各領域と工学領域を含むバランスの取れた超音波医学の発展を目指し、その任期半ばで病を負いつつも地方会運営に尽力されたが、2009年に不帰の人となられたのは誠に残念でならない。

急遽、山本先生を引き継いだのが現運営委員長の筆者である。山本先生のもとで工学研究と地方会運営に尽力されてきた工藤信樹先生（北海道大学大学院情報科学研究科・准教授）に副運営委員長をお願いした。超音波医学のさらなる発展には、研究・開発を推進する医師・工学者だけでなく、その臨床を実質的に支える技師の力が欠かせ

ない。筆者が2010年に札幌で開催した日本心エコー学会でも、研修医の参加や若手医師の企画登用とともに、地元の検査技師教育を重視した。地方会発足当初は、超音波医学の研究発表や研修の場は極めて限られていたが、最近では、北海道でも多くの催しが行われるようになった。昨年から、年2回の学術集会を年1回に減らす一方、その規模・内容を拡充した。今後も、日本超音波医学会だからこそできること、また、今まさに地域が必要とすることを重視しつつ、この領域と地域の将来を見据えた地方会活動を進めていきたいと考えている。